
RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGヒロインという名のチート野郎。

【Nコード】

N5849Y

【作者名】

菜智

【あらすじ】

大人気RPGから飛び出してきたのは9割ツンの1割デレなチート過ぎるヒロイン。おまけに、飛び出てきた先には立派なニート。そのニートとチートヒロインがまさかの居候というベタな展開へ発展！？

主人公「…あー。頭いてえ。」

ヒロイン「風邪か？」

主人公

対処1・まず、自己紹介。んで、居候。

「神とのゲーム。それは気まぐれ？」

そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気RPGゲーム。

だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を鷲掴みにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、カミヤシユウ上南集である。だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかない部屋の、自分の背後から。

『ほう。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』

思いつ切り大人びた声がするものだから、後ろを恐る恐る振り返ってみれば

『ん？どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』

見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの大人気ヒロインがいた。

「……」

取り敢えず、後ろのく誰か>は無視してゲームを進めていく。が

『ほうほう。』

だとか

『このダンジョンはこうなっているのか……。いやはや、興味深い。』

とかずつと言われていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。く誰か>はいつの間にか我がもの顔で俺の後ろにあるベッドで寛いでいた。

『あ！何故止めた！？私は見たいと言っに……。』

「ちよつと待て。」

見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄ったシワを伸ばしているく
誰か>を見ていると

『全く……。どうしてこうシワが出来るのか……』

いや、普通ですから。それ。

『おい、お前。早くゲームを再開しろ。私は見たいんだ。』

この大人気RPGヒロインを支持しているヲタクからしたら、きつ
とこの性格は……。どうなのだろう。

「あの、さ。貴方は、誰ですか」

『私か？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。
俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。』

「で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺
の所にいるんですか？」

『さあ。それは私の預かり知る事柄ではない。』

いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうしろと？

『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』

「じゃあ、誰の意思？」

『…………え、と。』

自称ヒロイン・ナツメは少ししょんぼりとしたような、少し言いつ
らいような顔をした。

『…………ゲームの、ボス。』

そんな顔を急に赤らめてぼそぼそと言われて、ときめかない男など
いないはずはなく。

「……はあ。」

だが、そんな現実からぶっ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺に
は備わっていないかった。

『ごほん。…………とにかく、だ。これから暫くの間、ここで世話にな
る。』

「…………は？」

俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言った。

「あのさ。ゲームの中に戻ってくれますか？」

『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな』

「…つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れないと？」

あー。頭痛い。遂に、自宅警備員丸三年の俺にも幻覚が……。

『と、いう訳で。これからよろしく願います。な？』

につこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。

…これは、面倒見なきゃいけないんだろぅなあ…。

これから起こるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。

…取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを再開した。

……後ろを気にしないように。

対処2・チートは現実でもチートww

前回までの振り返り。

大人気RPGから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちよつとの天然。

そんなツンツンデレ少女とチートヒロインチートヒロインの自宅警備員丸三年の居候物語。りっぱなチート

ナツメのちよつと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかにいがそれなりにゲームを進めていた頃。

俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらい（暗くてそれ以上は見えない）だろう。

そろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようにご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもっともっとと食べ物求めてくる。

気づけば残り物はなくなっていたが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。

ぐう。
うん。腹減ってるなあ、俺の胃よ。まだ足りていないんだろう？分かってるさ

ぐうう。
だが、それは鳴りすぎだろう。

自分の腹の音ではない音が俺の後ろで唸る。さあ、落ち着こう。そして、振り向くんだ。

振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。

「……狡い。」

「…は？」

「ご飯……狡い。私はまだ食べていないぞ。」

ああ、あの時にバッチリ起きて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行って何か食べる物を探したが……生憎と無かった。

「……無い、のか？」

「ああ、さっぱり全くだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」

「じゃあ、外に買いに行くぞ。」

…は？今、自宅警備員にとつての禁句が出てきたが。

「下には、コンビニエンスストア、があるのだろう？」

「買いに行け、と？」

「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行つてやる。」

あくまでも傲慢ツンの態度は崩さない。ここまでいくともう清々しい。

だが、ここで折れてしまつては自宅警備員ニートの名折れ。俺は若干強く「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行つてくれば？」

「…我を通すつもりか。私に対して。…いい度胸だ」

ナツメは口を手で押さえて小さく、くつくつく、と笑つた。そしていつもの傲慢な微笑みで。

「なら、私が連れ出してやろう。お前の意思とは関係なく、な。」

「何言つて」

ナツメは俺の言葉を無視して。

「シュンフウ
迅風」

その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。

「どうだ？私の魔法は」

目を開ければそこにはよく見知っているコンビニ<7時11時>があった。

「……は？」

「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」

「魔法って……！？ここは現実世界だろ！」

そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。

「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」

そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ項垂れた。

こうして、俺の自宅警備員生活は三年という短い期間で終わってしまった。

対処2・チートは現実でもチートww（後書き）

はあじめまして！今回はちょっと嗜好を変えてコメディっぽいお話です（、・・・）

ゲームのチートヒロインが暴れますwwでも、ちょっとシリアス投入してみたりw

ちなみに。私は最近（ちょっと前かな？）シリーズ15周年を迎えた某シリーズが大好きです。7。5さんのね（、・・・*）

対処3・ゲームの戦いは現実では結構なハードww

前回までのあらすじ。

ツン…もとい、傲慢^{ツン}デレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によって俺の自宅警備員生活は呆気なく終わってしまった。…なんだかなあ。

コンビニ<7時11時>である程度のご飯（勿論ナツメの分も込みで）をどっさりと買い込む。

その中にはご飯…なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入っている。財布が悲しい…。

「早く帰るぞ。」

そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のようにニコニコと微笑む。口調は何ら変わっていないが。

「…はあ。はいはい。了解しましたと。」

俺はどっさりと入ったビニル袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回している。

「どした…？早く帰るんじゃない？静かに」

ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮った。その只ならない雰囲気^{雰囲気}に俺は黙り込むしかなかった。

「…先に帰っている。私の分は取るんじゃないぞ？取ったら、分かっているよな…ん？」

ナツメは俺にそう言うと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行っていた公園へと走っていった。

俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気^{雰囲気}を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去った事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」

『いいえ。単に私が興味を持っただけです。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。』

並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。

「姿は見せてくれないのか？私はいつかりと相手を見ないと話せない性格なのでな。」

ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。『貴方の頼みは断れませんからねえ……。＜あの方＞からの命令もあります。』

木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しいほどの黒と青の相まつた見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。

「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ」

靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。

だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。

ただ、先のように妖艶な笑みで。

「^{スィオウ}水槍」

ナツメに飛来していた木の葉…。刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。

ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。

『……ははっ……』

唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。

ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していくと、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、そして、水龍の後ろを通り抜けていく。

先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される答えはたった一つ。

（後ろに私が動揺するものがある……っ！！）

ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もう一つの魔法を作動させる。

「っ影身！^{ウツシミ}」

ナツメの影を借りて創られたもう一人のナツメは本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動するとナツメが動揺するものゝを木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。

「^{ケンカ}護花」

影のナツメとナツメが動揺するものゝに覆いかぶさるように、大きな睡蓮の花が現れる。

「全く。私は帰っていると、言っていたはずだが」

ナツメの口調はしっかりと怒っていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。

「…ははっ。まあ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」

その表情に少しは驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3 ゲームの戦いは現実では結構なハードww(後書き)

…戦闘シーン楽しかったです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますww

対処4・チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。

取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、と。もうこれで終わりか？」

ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。

『……秘欺。^{ヒメキ}』

声の響きが薄れていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしっかりと歩みをナツメに進めていく。

「バックアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」

影の<ナツメ>も後ろの集を護りの花“護花”^{ケンカ}に包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を二人で紡ぐ。

それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。

『…言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』

二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。

『其方は我と共に、照らす光と在れ。』

形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。

『^{フライングデウスング}
誉の翼』

鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。

「お前の技…秘欺^{ヒメキ}は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一体ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身の量産系^{ワッペンミ}か？」

桜の花弁となった光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

っ。

「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」

……ふあ、さ……ざああああああ……

光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによって、刃となった花卉は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。

だが、その中でナツメは小さな違い…異変に気付いた。

撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まっていく事に。

その影は大勢の影よりもかなり後ろの方…まるで指揮官であるかのように立っていた。

（つまり、あれが本体…！）

ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。

「全く出てこないからいつもの影かと思っていたが…そうではなかったな。」

影は口をニヤリ、と歪ませて

『流石は“^{チート}神力”の名を冠するだけあって見破られましたか…いやはや残念。』

影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。

「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会っていないかアサギ・リヴェリアス」

『確かに。しかも私は影を通してでしか見ていませんものねえ。ナツメ・イウエ・リステイアート。』

二人は和やかな微笑みで。…互いに火花を散らして。

「で。お前が来たということは何かは預かっているのだろう？でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何て？」

男性…アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。

『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか…自らく絆を壊してくるか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をする
と霧のように霧散して消えた。

“護花^{ケンカ}”が消えて集はナツメの所へと向かって、その表情を見て驚
いた。

「……あ。どうした？」

ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにい
つもの傲慢な微笑みに戻っていた。

「何を言われたんだ？」

「……知りたいか？」

ナツメは自分の影身^{ワッシミ}を戻すと少し迷ってから。

「ゲームの中に戻る方法がある、と……」

「良かったな！」

集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムツと
した顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。

「嬉しそうだなあ……。まあ、いい。帰るぞ。」

さっさと歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論

チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構
……見応えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかばないw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849y/>

RPGヒロインという名のチート野郎。

2011年11月23日13時52分発行